東海テレビ　この1年の取り組み

2018

東海テレビ放送株式会社

はじめに

東海テレビ放送株式会社
代表取締役社長
内田　優

2011年8月4日の「ぴーかんテレビ不適切テロップ問題」（ぴーかん問題）から7年が経ちました。以来、信頼を取り戻すため放送倫理教育の充実に努め、外部講師を招いた全社研修会や勉強会を継続的に開催しています。また、8月4日を「放送倫理を考える日」に定め、毎年全社集会を開催。各部署から報告されるヒヤリハット事例を全社で共有し、リスクを未然に防ぐ努力を重ねています。

本報告は岩手県をはじめ東北地方の被災地支援、放送事業を通じた社会貢献など2017年7月から1年にわたり実施してきた取り組みを皆さまにお知らせするために作成しました。

まず被災地支援では、ニュース・報道番組25本、情報番組8本を放送して、復興の進捗状況や人々の営みなど7年が経過した東北の「今」を伝えました。被災地復興の一助となるべく、名古屋地区で開催された東北物産展の模様も紹介しております。

昨年8月の全社集会では「ぴーかん問題」後に入社した従業員の意見を聞く機会を初めて設けました。当時の教訓、反省を風化させないためです。

東海テレビは今年、開局60周年を迎えました。地域密着をさらに推し進め「エリアのみなさんにとっての“ふるさと”でありたい」という強い思いを込め、周年キャッチフレーズを「ふるさとイチバン！東海テレビ」としました。レギュラー番組に加え、60周年を記念する特別番組やイベントなどを通じ、視聴者の皆さまに感謝を伝えるとともに、より信頼され、愛される放送局を目指してまいります。

また、60年の節目を「第二の創業」と位置づけ、向こう3年間の課題と目標を設定した経営計画を新たに策定しました。テレビを取り巻く環境が激変する中、番組のネットへの同時配信、4Kなどの高精細映像制作、働き方改革といった課題にも積極的に取り組んでまいります。視聴者はじめ関係者の皆さまには、今後も弊社の活動に対し、一層のご支援、ご指導いただきますよう、お願い申し上げます。

＜ビジョン＞　愛され、信頼される地域最良のテレビ局

＜基本理念＞

1．放送の持つ公共性、公益性を深く自覚し、
社会的使命感と高い倫理観を持って職務を遂行する。

1．ジャーナリズムを堅持し、表現の自由を守り、
正確で迅速な報道を通じて視聴者の知る権利にこたえる。

1．「ふるさとのテレビ」として地域密着を最優先に、良質な番組制作やイベント・
事業を通じて、市民生活に役立つ情報と健全な娯楽を提供する。

1．ライフラインとしての使命を自覚し、地域の安全・安心の確保に努める。

1．放送局として自主・自立を守るため経営の安定を図る。

＜基本方針＞

1．安全な制作体制のもと、自社制作番組のさらなる充実を図り、視聴率の
強化に努める。

1．コンプライアンスの推進と放送倫理教育を徹底し、プロフェッショナルとして
ふさわしい放送人の育成を進める。

1．働き方の見直しなど、健全で健康な労働環境の実現に取り組む。

1．東海テレビ、グループ会社、協力会社とのコミュニケーションを密にし、
活気ある職場作りに努める。

1．集中と選択を推し進め、チャレンジ精神を大切に新規事業の創出などに
取り組む。

1．4K、8Kなど新技術に適切に対応するとともに放送とインターネットの新たな
関係を構築する。

1．災害時の放送事業継続のため、引き続き設備等の強化を図る。

1．震災被災地への支援を継続する。

CONTENTS

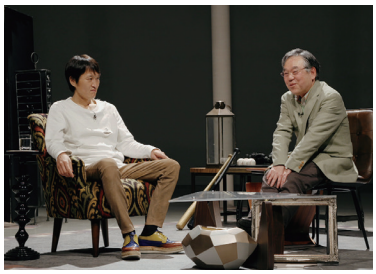
01　はじめに
02　ビジョン・基本理念・基本方針
03　東海テレビ 開局60周年にあたり
04　放送倫理の意識向上への取り組み
07　岩手・東北支援の取り組み
10　第三者意見　社外アドバイザー
11　地域社会への貢献
16　視聴者からのご意見
17　第三者意見　オンブズ東海
18　この1年の主な取り組み・おわりに

東海テレビ 開局60周年にあたり

東海テレビ放送は、2018年、開局60周年を迎えました。
1958年12月開局から、正確で公平公正な報道、豊かで健全なエンタテインメントを視聴者の皆様に提供し、地域文化の向上に努めてまいりました。
60年目のキャッチフレーズは「ふるさとイチバン！東海テレビ」。
地域に寄り添うテレビ局として、番組のみならず、イベントなど様々な機会を生かして、貢献してまいります。

主な『東海テレビ開局60周年記念』番組

▼「私のドキュメンタリー10の旅」
〈ドキュメンタリー番組
1月2日（火）から放送〉
東海テレビが制作した、ドキュメンタリー映画の現場に、元NHKアナウンサーの三宅民夫さんが訪れ、映画と共に“今”を案内する。


「私のドキュメンタリー10の旅」三宅民夫さんとゲストの千原ジュニアさん

▼「ナゴヤにたけしがやって来た！」
〈バラエティ番組／4月27日（金）・5月4日（金・祝）放送〉
ビートたけしが、名古屋とその近郊の代表的スポットを訪れ、ご当地にまつわるエピソード、人とのふれあいを独特の“たけしワールド”で遊び尽くす。

▼オトナの土ドラ
「家族の旅路 家族を殺された男と殺した男」
〈連続ドラマ／2月3日（土）～3月24日（土）放送〉
家族惨殺事件の容疑者・被告人として死刑宣告された男と事件で生存した男の物語。悲しく切ない家族、親子の軌跡を描いたヒューマンドラマ。

主な『東海テレビ開局60周年記念』イベント

▼「第22回スーパークラシックコンサート」
今年3月から7公演開催

▼「モネ　それからの100年」
4月25日（水）～7月1日（日）名古屋市美術館

▼「ダイハツ キュリオス 名古屋公演」
11月22日（木）～2019年1月27日（日）
名古屋ビッグトップ（ナゴヤドーム北）

▼「アートアクアリウム展 名古屋・金魚の雅」
7月21日（土）～9月16日（日）松坂屋美術館

「モネ それからの100年」名古屋市美術館にて開催

このほか、東海テレビ開局60周年応援ソング「You're My Love」を発表しています。

開局60周年の節目を迎え、新キャラクター「イッチー」誕生。

今から2年余り前の春、全従業員に募った開局60周年の企画提案の中にキャラクターに関する提案が数多く寄せられていました。
その後、社内で「キャラクター検討チーム」を発足、検討を進めた結果、60周年を機にキャラクターを一新することになりました。キャラクターデザイン及び名称について、当社の美術部を中心に、多くの従業員、協力スタッフ等の皆さんからアイデアやアドバイスを頂き、何度もブラッシュアップを重ね、新キャラクター「イッチー」が誕生しました。
デザインは、安らぎ、親しみ、新鮮さをコンセプトに、草原に咲く菜の花、ひまわりをイメージした「黄色」と澄みわたる空、清らかな川をイメージした「青色」の2色をベースに構成、名称は「1」チャンネルをストレートに表現し、周年を機に新たな一歩を踏み出す意思、そして視聴者第一の思いを込めています。
開局60周年がスタートした今年1月から「ふるさとイチバン！東海テレビ」という新たなスローガンと共に元気に躍動しています。

新キャラクター「イッチー」

放送倫理の意識向上への取り組み

東海テレビでは、コンプライアンス、放送倫理を身に付けた放送人を育成するため、研修や勉強会を設けています。

平成29年度　放送倫理を考える全社集会

東海テレビでは「ぴーかん問題」をきっかけとして、問題が発生した8月4日に毎年、「放送倫理を考える全社集会」を開催しています。昨年度の集会には東海テレビとグループ会社従業員、協力会社スタッフなど合わせて、377名が参加しました。
冒頭、内田社長は「6年が経ち、我々はあの日を、忘れることは決して許されることではない。過去の過ちをしっかりと胸に刻み、痛みと反省を持ってはじめて日々の仕事をすることが認められ、それが我が社の信用回復につながると信じている」と挨拶しました。
集会は、各部報告のほか、ひとつは集会の精神を継続させるための若手社員からの報告、もうひとつはグループ会社の業務リスクの認識といった2つのテーマを設定しました。
グループ会社からは、機材トラブルをおこさないような対処、危機管理の徹底について報告がありました。また、若手からは、正しい情報を送り出す使命。そして、視聴者の声を常に受け止め、伝えることへの注力。発言することで、情報番組の制作に対する意識を高めていました。
さらに番組制作各部からは、視聴者対応担当を経験した制作プロデューサーは、『直接聞いた視聴者の声を踏まえ、番組制作に携わりたい』として、メールなどに必ず目を通していること、などの報告がありました。
参加者からは「当たり前のことを当たり前にする事の大切さを再確認した。」「情報を伝える恐さを忘れてはいけないし、責任の重要さを感じた。」などの意見がありました。
我々はこれからも視聴者の声を受け止めながら番組、イベントを創り出していきます。

平成29年度 放送倫理を考える全社集会

日常の業務確認

番組制作現場、イベントの運営現場ではトラブルに至らないまでも、様々なヒヤリ・ハット事例があります。
再発を防ぎ、少しでも改善するため、スタッフは話し合いや日々の注意で、安心・安全を心がけています。

ロケや中継の時、街の方々、周囲の方々に迷惑をかけないために

- ロケに帯同する人数を必要最小限にし、占有スペース自体を最小限にする。
- ロケでも中継でも、外に出るときには誰にでも見られていることを常に考えて行動する。
- ロケ取材の時、事前に声をかけて、「顔出しNG」の方の要望を確認する。この情報をスタッフ全員で共有する。
- インタビューなどは原則顔出しだが、顔出し拒否の場合、極力事後の加工をしないよう、背中から撮影するなど顔をわからないようにする。

間違いのない番組作り

- おかしいと思うところは、立場に関係なく口に出して言う。言える環境を作る。
- 思い込みはなくす。とくに、イレギュラーな場面では注意する。
- 番組内で取り扱う物について、ドラマなどでは商標、意匠などの権利を念頭に入れ、情報番組などでは偽物を出さないよう注意をする。
- 出来上がった番組を制作者だけでなく社内複数部署の多角的な方面からチェックをし、問題ないか確認している。
- 映像・音声を電波で送るときは、留意事項を書いたメモを映像として撮影して一緒に送る。

安全なイベントへの取り組み

- 災害など緊急事態に対処するため、会場やその周辺の状況を目視で把握し、現状に即したマニュアルの見直しを行う。
- 飲食イベントや物販を伴うイベントが多くなる昨今、賞味期限の確認など食品の安全性についてスタッフに対応を徹底するよう呼びかける。

「フェイクニュースとメディア」平成29年度下期放送人研修会

BuzzFeedJapan創刊編集長
古田大輔氏

「テレビ自体がデマツイートに踊らされ、それをコンテンツにしてしまっている」…ネットメディアBuzzFeed Japanの古田大輔創刊編集長を招き、2月19日に開催した放送人研修会「フェイクニュースとメディア」は示唆に富むものでした。
2016年のアメリカ大統領選挙で俄然注目されるようになったFake news。しかし、「嘘」や「虚偽」という言葉に置き換えれば、それは私たちが日頃から「絶対に流してはいけない！」と叩き込まれてきたものです。取材やロケで正しい情報を入手し、視聴者に送り届けるという姿勢、これまでと何ら変わりありません。古田さんの話からは、「情報は玉石混交」と言われがちなネットの世界で、丁寧な検証を通じ、正確な情報を提供しているという矜持が感じられ、新しいメディアの運営からは多くの刺激を受けました。
音声合成やリップシンクなどAI技術の進化で、インタビューも意のままに「作成」できる時代になったとのこと。紹介された映像を改めて見直しましたが、これが巷に出回ったときのことを考えると本当にゾッとします。何をよりどころにして真贋を確かめればいいのか、時代とともに変容する情報をどう見極めればいいのか。リテラシーについて一層深く考える機会となりました。

平成29年度下期放送人研修会

下請法説明会

編成開発部では、「下請法」のポイントを知ってもらうための説明会を、昨年12月14日から20日までに、計8回開催し、約60名が参加しました。今回は、番組制作者が知っておくべき「下請法」の基礎や義務などをあらためて周知するために行われました。とくに発注者（親事業者）の立場になりうるテレビ局として、発注書面の交付や遅延利息の支払いなど下請事業者に対する法的義務をしっかりと果たすよう呼びかけました。また、「優越的地位の濫用」を防ぐため、親事業者の禁止事項の周知を徹底しました。

個人情報保護規程　改定説明会

昨年5月に改正個人情報保護法が全面施行されたことに伴い、当社の個人情報保護規程を改定し、説明会を10月～11月に本社、東京支社で計8回開催しました。
説明会には従業員、スタッフ合わせて117名が参加し、改正個人情報保護法の概要とともに、法改正に伴い「要配慮個人情報」や「匿名加工情報」、「視聴履歴」などを新たに盛り込んだ当社規程の改定ポイント、業務上の詳細な運用方法について理解を深めました。

個人情報保護規程　改定説明会

ネット法律勉強会

昨年7月26日、インターネット上でニュースを発信するときに、法的に注意すべき点は何か、など、報道部が専門家を講師に迎え勉強会を開催しました。インターネットで発信したニュースは、原則、責任は自社が発信した内容までで、そのあと勝手に転載されたものについては責任を負わない。また、テレビのように基本的に1回限りの露出ではなく、ネットのように転載もされうるメディアであると考えると、取材対象者の気持ちの堪えうる限界が変わってくるので、注意しなければならない、などアドバイスがありました。報道機関として新しいメディアの特性を理解し、留意しながらニュースや情報を発信していきます。

ハラスメント研修

今、パワーハラスメントやセクシュアルハラスメントなど様々なハラスメントが、社会問題化しています。当社でも「ハラスメント研修」を行いました。今年は、管理職（コンプライアンス責任者）とすべての従業員など立場ごとに分けた研修でした。管理職対象の研修は3月に行われ、『「マネージャー（管理職）に求められるスキル」指導』『ハラスメントに対する認識』など、グループディスカッションなどを交えた内容でした。
その他従業員には、とくにパワーハラスメントについて、どのような言動がハラスメントとなるのか、などeラーニングで学び、理解を深めました。

コンプライアンス責任者会議

「コンプライアンス責任者会議」は、社内各部署のコンプライアンス責任を担う部長、グループ会社のコンプライアンス担当者が出席し、原則3カ月に1回開催してリスク情報の共有と危機管理意識の向上に努めています。
会議では各部で起きたトラブル案件やヒヤリ・ハット事例、法令の再確認など、業務上の様々なテーマを取り上げて注意喚起し、事例を共有することで再発防止につなげるとともに、時々刻々と変化する放送を取り巻く社会環境に適正に対応できるよう、企業コンプライアンス全般に関して理解を深める場としています。
2017年度は、放送基準解説書の改正、標的型メール訓練の実施結果や改正個人情報保護法に伴う社内の対応、BPO事案などについて報告しています。

コンプライアンス責任者会議

コンプライアンス委員会

「コンプライアンス委員会」は法令を守り、公正で誠実な企業活動を実践すること、また情報資産の安全かつ適正な運用管理を図ることを目的として東海テレビとグループ会社の役員を中心に構成される組織です。年に2回開催し、番組やイベントを中心としたコンプライアンス関連の情報共有を行っています。2017年9月の委員会では、この年5月に施行された改正個人情報保護法について、顧問弁護士から改正のポイントの解説をいただきました。また、2018年3月の委員会では、社会問題化しているハラスメントに関して、留意点や会社が訴えられた判例について、説明を受けました。事務局から、ハラスメントについて、研修をおこなう趣旨や今後の予定などを報告しました。
これらの課題について委員会を通じ、取締役、管理職のコンプライアンス意識を高め、経営に反映させることとしました。

コンプライアンス委員会

オンブズ東海

「オンブズ東海」は当社の放送やイベントを監視し、視聴者の皆様との信頼関係の構築に寄与することを目的に2012年1月に発足した第三者機関です。
年4回開催される委員会では、視聴者の皆様から寄せられたご意見やコンプライアンスに関する事例、放送倫理や社会貢献の取り組みを中心に、社内で見落としがちな課題を第三者の視点から厳しくチェックし、意見や適切なアドバイスをいただいています。また委員は、東海テレビで定期的に開催する放送倫理に関する研修会、8月に開催される「放送倫理を考える全社集会」にも出席していただき、当社の業務活動や様々な取り組みを見つめていただいています。

坂井 克彦 委員長
㈱中日新聞社
相談役

橋本 修三 委員
橋本法律事務所
弁護士

東　珠実 委員
椙山女学園大学
現代マネジメント学部
教授

オンブズ東海 委員会

コンプライアンス通信

コンプライアンスや放送倫理、情報セキュリティ、個人情報保護に関する様々な情報を、毎月1回、東海テレビの役員、従業員、協力会社のスタッフなどにメールで配信をしています。放送業界で話題になっている事件や、ヒヤリ・ハット事例、BPO（放送倫理・番組向上機構）事案などを全社で共有し、放送事故の防止や放送倫理意識の向上に役立てています。

岩手・東北支援の取り組み

東海テレビでは、東日本大震災で被災した岩手県など、東北地方の支援も重要な活動と考えています。これからも、番組やイベントなど様々な活動で支援をしていきます。

1 放送での東北支援

東日本大震災から7年 ～被災地の『今』を見つめる～

2018年3月7日(水)放送
制作部　伊藤 芳人

「スイッチ！」では、今年3月、特集企画で震災から7年が経った岩手県陸前高田市と宮城県気仙沼市の“今”を取材しました。番組としては2年ぶりに訪れる場所。陸前高田の旧市街地では土地全体が以前より10メートルもかさ上げされ、新しい街ができ始めていました。去年の春に大型ショッピングモールがオープン。その隣には遊具のある児童公園も設置され、たくさんの家族連れが遊んでいました。そこに溢れていたのは、地元の人たちの“笑顔”。買い物などがしやすくなったのはもちろん、それ以上に、地域の交流の場ができた事が何より嬉しいと話していました。そして気仙沼市では、復興屋台村で食事処「大漁丸」を営んでいた菊池幸江さんと再会。現在は大島に新店舗をオープンし、夫婦で新たな一歩を踏み出していました。2人への取材で印象的だったのは“あたり前の日常の大切さを感じている”という言葉。一日一日をかみしめながら生きている夫婦の姿に、熱いものがこみ上げてきました。おととしから去年、去年から今年…年々街は変わり、被災者の想いも変わってきます。それを記録し伝え続けることが、私たちができることだと思います。

岩手・陸前高田市　“奇跡の一本松”

宮城・気仙沼市 遊覧船から気仙沼港を臨む

あの日から7年 復興を誓う 宮城を旅する

2018年3月11日(日)放送
制作部　塚本 太夢

「2017年12月末時点で50%弱ですね」。宮城県気仙沼市内の下水処理工事。7年でやっと半分。完成は、再来年といいます。「復興」には程遠く、驚きを隠せませんでした。
3月11日放送の「スタイルプラス」では、宮城県南三陸町と気仙沼市を取材。南三陸町では復興のシンボルとなっている商店街と、震災の語り部として活動するタクシードライバーを取材しました。被害の大きかった南三陸町は昨夏、スーパーが出来たばかり。生活環境はまだまだ整っていないのだと、強く感じました。
気仙沼市では、復興支援として名古屋市役所から派遣された男性職員が、「被災地を助けたい」強い思いで働いている姿を取材。また、全国に出張し、寿司を握って、被災地の“いま”を知ってもらう活動をする板前さんにもお話を伺いました。
皆さん共通しているのは「被災地の“いま”を知ってもらいたい」ということ。知ってもらうことで足を運び、“いま”を感じてもらうことが支援につながる、と話していました。
被災地の現状を「知らない」かもしれない視聴者の皆さんに、「伝え続けること」。被災地のことを「忘れないこと」が、私たちの使命と感じています。今後も、被災地のありのままの姿を伝えられれば、と改めて感じています。

南三陸町の復興作業の様子

南三陸町さんさん商店街の高台から

舞台は岐阜の訓練所 犬を追って東北へ
「じゃがいも大使 災害救助犬への奮闘記」

2017年9月1日(金)放送
報道部　藤井 章人

被災地生まれの犬が救助犬に。美談を想像して、岐阜の山間にある犬の訓練所をめざした。木々のトンネルの先に被災地から預けられた47頭がいた。6年前の夏だった。救助犬を目指していたのは、東北ののどかな村で生まれた「じゃがいも」。しかし、認定試験は不合格続き。美談は容易くは実現しなかった。見限ったのだろうか、取材陣の数は回を重ねるごとに減っていった。結果ばかりが求められていた。

47頭それぞれに物語があった。帰郷した1頭は、聞き慣れた声に駆け出し、主の胸に飛び込んだ。表情は互いに明るかった。里子に出た犬もいれば、人知れず眠りについた犬もいた。そして、いまだ岐阜で暮らす犬がいる。

震災6年目の春、避難が解除された村には真新しい建物が並んでいた。それでも、黒い袋は山積みのままだった。

その夏、じゃがいもは11回目の試験で合格した。一歩ずつ成長していた。歩みは遅かったのかもしれない。ただ、成し遂げた。

震災からの時の流れ。この夏、ようやく帰郷を果たそうとする犬がいる。犬を追って東北に足を運び、人と出会った。犬たち、そして被災地で暮らす人々のこの先は…。木のトンネルをくぐって始まった取材、この夏7年目に入る。

災害救助犬“じゃがいも”

2 イベントなどでの東北支援

東海テレビ感謝祭2017
復興支援ブースでの『観光・物産』のPR

2017年10月28日(土)～29日(日)
営業推進部　杉山 祐輔

東海テレビが視聴者や地域の方々に感謝の気持ちを伝えるイベント「東海テレビ感謝祭」。

東海テレビ感謝祭2017 復興支援ブース

今回は日程の関係で参加できなかった宮城県を除く、岩手県・福島県・熊本県の3県が参加。『復興支援ブース』と銘打ち、2日間の来場者に対し、物産品の販売と観光PRを行いました。

今年は、報道部の協力を得て、地元の特産品などを販売する「マルシェOne」エリア内に『復興支援ブース』を展開することで、来場者の回遊が生まれ、相乗効果で賑わいを出せるようにしました。残念ながら、台風直撃の影響で2日目の途中でイベントが中止となったこともあり、各県とも売り上げは芳しくありませんでしたが、『観光・物産のPR』が出来る機会を設けたことに対して各県から御礼を頂きました。東海テレビ社員による応援（ブースでの声出しなど）に対する感謝の声も頂きました。

震災から時が経ち、人々の記憶が薄れていきかねない時だからこそ、震災のことを常に思い続け、今、我々が出来ることを継続していくことが大切なのだと再認識する機会となりました。

この1年にお伝えした東北関連の主なニュース・情報番組・特別番組（2017年7月～）

ニュース「みんなのニュースOne」

2017年

- 8月15日　「じゃがいも　ふるさと飯館村の大使に」
- 8月31日　「震災から6年半　岐阜からふるさとへ」
- 11月 7日　「大東北展」（東北6県の物産展）

2018年

- 1月11日　「岩手・陸前高田市の中学生が名古屋へ」
- 2月 6日　「震災津波の瓦礫でオブジェ」（ノリタケの森）
- 3月 5日　「写真展『ふくしま復興のあゆみ』」（中日ビル）
- 3月 9日　「『大谷主義』福島の住民帰還について」（福島県川俣町）

情報番組「スイッチ！」

2017年

- 10月26日　“いわて純情娘”がスタジオ生出演 ～岩手の食と観光を紹介～ 岩手産ブランド米「金色の風」新米プレゼント

2018年

- 1月24日　「宮城県の観光と物産展」（名鉄百貨店）番組内生中継
- 2月 1日　「岩手県の観光と物産展」（丸栄百貨店）番組内生中継

東海テレビ福祉文化事業団
地域福祉向上、そして被災地支援のために

「社会福祉法人 東海テレビ福祉文化事業団」は昭和54年に設立され、東海地方の障がい者や高齢者、子どもたちの福祉の向上に携っています。
募金活動として、「愛の鈴しあわせキャンペーン」を年間通じて展開すると共に、軽自動車を福祉施設に贈る「愛の鈴号寄贈」や、障がいを克服して社会に貢献されている方々を顕彰する「ひまわり賞」などの事業を、毎年実施しています。
また、本事業団では災害援護事業もひとつの軸としており、この地方の災害だけでなく、平成23年の東日本大震災の発災直後から義援金を募り、これまでに合計1億2064万円あまりを、また平成28年の熊本地震でも義援金191万円あまりを、それぞれ内閣府の窓口などに寄託しました。
これからも地域福祉充実のお手伝いをすると共に、被災した地域を支援していきます。

48thマンシングウェアレディース東海クラシック
東日本大震災等チャリティ会場（平成29年9月17日）

贈呈された「愛の鈴号」

岩手産「ひとめぼれ」新米の社内販売での購入実績について

- 2017年10月、11月に岩手産「ひとめぼれ」新米の社内販売。5kg入り3,200円を253袋、合計1,265kgを販売。
- 2017年4月から10月までに社内食堂で岩手産「ひとめぼれ」新米を合計3,305kg消費。

『あばっせ被災地』、『あばっせ岩手』

経営戦略室　野瀬 義仁

2017年8月1日、内田社長に同行して岩手県陸前高田市へ。三度目の訪問です。
東日本大震災の津波で甚大な被害を受けた陸前高田は、中心市街地（約20ヘクタール）を海抜10メートルの高さに嵩上げし、その上に町を再建する計画。訪れるたびに姿を変えていきます。
2013年に訪れた時には、まだところどころに巨大なガレキの山が残り、かつて町があった場所では、生い茂った夏草の間から家の礎石だけがのぞいていました。
2016年には、嵩上げ工事で見上げるほどの高さに盛土され、ダンプカーばかりが目立っていました。
そして去年、10メートル以上に盛土されたかつて町の中心部に新しい複合商業施設がオープンしていました。買い物に訪れる人。食事に立寄る人…。どこにでもある当り前の光景が見られるようになり、復興は順調に進んでいるかのようでした。ところが背後を振り向くと風景は一変します。そこには茫々とした地面が広がっているだけ。ふるさとを取り戻す努力はまだまだこれからが本番です。
新しい複合商業施設の名は「アバッセたかた」といいます。この地方の方言で「あばっせ」は「いっしょに行きましょう」という意味だそうです。皆さんも「あばっせ陸前高田」、「あばっせ岩手」。被災地の今を訪ねてみませんか。

嵩上げされた中心市街地に開業した「アバッセたかた」

道の駅「高田松原」から海を臨む。
巨大堤防で海は見えなくなった

陸前高田の嵩上げされた中心市街地

第三者意見

社外アドバイザー
音　好宏
上智大学 教授

東海テレビでは、2011年の「ぴーかんテレビ不適切テロップ」事件以来、8月4日を「放送倫理の日」として全社的な集会を続けている。この集会も今年で7回目となるが、こういった全社集会が継続されることの価値は大きい。継続することで、「放送倫理」を社を挙げて掲げることの意義が、東海テレビの構成員一人一人に染み渡り、その思想は血肉化していくからだ。

もちろん職場環境を改めて見直し、そのモラリティを問うという作業は、いま、時代が要請していることでもある。

政府が先の国会の最重要法案と位置づけていた働き方改革関連法案は、6月末にようやく参院を通過、同関連法は成立した。経済のグローバル化が進むなかで、日本の労働環境の整備が喫緊の課題となっていたからだ。この働き方改革関連法案が国会で審議されていたこの4月、在京テレビ局の女性記者に対する政府高官によるハラスメントが、週刊誌へのリークという形で報じられた。当該高官の行為はもちろんだが、当該記者の訴えを受け止めることができなかった記者の所属するテレビ局の対応も、厳しい非難に晒された。

その後、メディアの現場において、過去のハラスメント事案が続々と報告されるなかで、メディアの現場に対する世間の目は、より一層、厳しいものとなっている。以前であれば、メディアの現場が、就職学生のなかでも志望者数の多い「憧れの職業」との密かな自慢との裏返しで、「メディアの現場＝3K職場」と自嘲気味に語る者も多かったが、ハラスメントや過労死といった事案がたびたび明るみに出るなかで、いま、若者から現実に職場環境の改善を求められる職場との認識が広がりつつある。

現場の最前線を統括する者は、自らの部署の厳しさを吹聴したがる傾向がある。そこには、自らの職能に対するプライドが込められているのかもしれない。また、その職能を示すことが、次なる制作実績、ビジネス実績につながるとの思いもあるだろう。しかし、そのような形で労働意欲を鼓舞する現場の姿に、時代錯誤を感ずる若者が増えているのもまた事実だ。苦労をして創造的な番組を作ったり、取材を重ねて優れた報道を届けたり、クライアントの意向を丁寧に汲み取った広告をセールスしたり、オリジナリティの高いイベントを企画したりといった東海テレビの様々な現場で行われている業務は、その現場を支えるスタッフの多大の努力によって成り立っている。

いま、働き方改革で問われているのは、職場を支えるそれらのスタッフ一人一人の尊厳を担保できる組織、多様性を維持しつつモラリティが担保されている組織だ。メディア企業にとって、最大の財産がスタッフであることは言うまでもない。東海テレビのモラリティを高める様々な活動を通じて、より一層スタッフの充実を図っていただきたい。

音　好宏
おと よしひろ

上智大学文学部新聞学科教授。
北海道札幌市生まれ。
1990年 上智大学大学院文学研究科新聞学専攻博士課程修了。
日本民間放送連盟研究所勤務後、1994年より上智大学専任講師、
その後、助教授を経て現職。専門はメディア論。

地域社会への貢献

東海テレビでは、「ふるさとのテレビ」として、地域密着を最優先に、東海地方の魅力を引き出すとともに地域社会に貢献できるコンテンツを送り続けます。

1 放送での地域貢献

「ニュースOne」
ふるさとのニュースを作る

(月)～(金)16:49～19:00
報道部　伏原 健之

高井一キャスターと上山真未キャスター

64歳の高井さんが17年ぶりにニュースに復帰する。それが「ニュースＯｎｅ」の最大のウリです。なぜ今、還暦を越えた高井さんなのか？知名度が高いから。アナウンス技術が高いから。番組ターゲットの中高年に人気があるから。そんな理由だけではありません。高井さんは「スタイルプラス」や「スイッチ！」で10年以上も東海三県を“街ブラ”してきました。この地域を誰よりも知りつくし、誰よりも愛している人だから、私たちは高井さんと一緒に番組を作りたいと思いました。

「ニュースＯｎｅ」が最も大切にしていることは“地域密着”です。スーパーは地名と地図の表記を大きくし、原稿も“どこで”を最初に書くように変えました。情報の羅列ではなく、できるだけ地域の人たちの声をインタビューで伝えています。事件や事故だけでなく、季節の話題や地域の小さなニュースも増やしました。原稿を読む速度を落とし、音楽を控え、キャスターの声がちゃんと届くように努めています。視聴者投稿から企画を作ったり、新企画「ふるさと一ク！」では、地元の人たちと毎日直接お話しています。

「ニュースＯｎｅ」はローカル局の原点に返り、“ふるさと”を愛する男、高井キャスターとともに、地域に貢献することが一番大事だと考えています。

「スイッチ！」
「ふるさと イチバン！」をかたちに…

(月)～(金)9:50～11:15
制作部　伊藤 芳人

6年目となる「スイッチ！」。今年は、東海テレビ60周年のキャッチフレーズでもある「ふるさと イチバン！」をコンセプトとして、より地域に寄り添う番組作りをしています。4月からスタートした「ふるさと イチバン！ご自慢デー」は、東海3県125市町村をひとつずつ巡って、地域の魅力を伝えていくキャラバン中継。この企画をスタートして思ったことは、普段、あまり取り上げられない地域にも、自分が知らない面白いネタがたくさんあるということ。どの地域も新名物を作り、街を活性化しようと頑張っている、そんな地域の人々の熱い想いを、中継で後押しできればと思っています。

「地域に寄り添う」…その精神を問われる事態が先日ありました。

７月に西日本を襲った大雨、この地方では岐阜県関市の津保川が氾濫し、その周辺地域が被害にあいました。実はこの時、番組の名物コーナー「はじめまして」でロケしていた場所が、まさに津保川沿いでした。取材した店も浸水の被害にあっていました。「これだけの被害が出ているのに、被災前のVTRを何事もなかったように放送できない」そうした思いから「はじめまして」を一時休止に。さらに、収録を終えていた場所を再取材し、被災後の街の様子や、そこで頑張る人々の様子を放送することにしました。

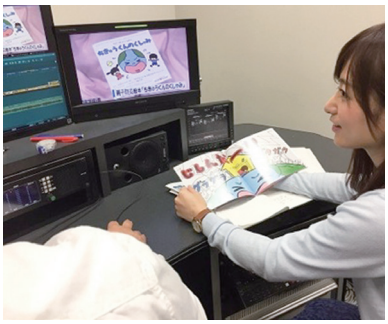
今回、14本ものVTRが放送見送りに。しかし「地域に寄り添う」とはどういうことかをさらに深く考えるきっかけとなりました。「ふるさと イチバン！」…言葉だけではなく、それを形にできる番組であり続けたいと思います。

MCの長島弘樹アナウンサーと恒川英里アナウンサー

「みんなのニュースOneスペシャル　みんなの防災」

防災ママたちの365日

2018年3月10日(土)放送
アナウンス部　速水 里彩


編集作業の様子

「みんなの防災」で、私はMCに加え、ディレクターとして取材・編集にも携わりました。取材先は、ママたちでつくる防災組織・「かきつばた」。ニュースの企画で取材したのがきっかけです。

―地震の時子供を守れるママに―

ちょうど1年前「かきつばた」が始めた「防災絵本づくり」。それは「南海トラフ巨大地震に備え、子を持つ親はどうすればいいか」という特番のコンセプトとも重なり、アナウンス業務と並行し取材を続けました。

子育て・家事・仕事をこなしながら、次第に出来上がっていく絵本。「地震は地球のくしゃみ」…主人公や避難先をあえて空欄にし、自分たちの名前や避難先を書き込む…ママならではのアイデアとわが子への想いが詰まっていました。

地震を我が事ととらえ、何度も繰り返し読んで備える。それは防災の報道も同じです。

放送後「かきつばた」のメンバーからもらったお礼の言葉。「絵本の問い合わせが来ていて、まだまだ増刷します！」。

母親らが制作した防災絵本「ちきゅうくんのくしゃみ」

巨大地震が起きた時、1人でも多くの人の命が助かるように一頑張るママたちを応援しながら、防災報道をこれからも続けていきたいと思います。

「東海テレビ開局60周年記念

池上彰×ナゴヤ
名古屋の経済を楽しく学びまショー」

2018年3月30日(金)放送
制作部　戸松　準

“ナゴヤ”を語る池上彰さん

近年、名古屋は「観光地として最も魅力にかける街」とアンケート結果などから言われています。

それはなぜか？

今回の番組では、名古屋の大学でも教鞭をとり、地域経済に取り組んでいる池上彰さんが、独自の視点でこの話題を分析・紹介しました。

「名古屋は観光PRが上手くない？」「観光都市より産業都市化を目指した」「広い道が多く、人が集まりにくい？」など様々な点を取り上げましたが、これも池上さん自身が東海地方に興味を持っているからこそ出た、厳しくも愛のある独自分析。

そして最後に池上さんがまとめた言葉は、「全国に先駆けて産業都市化を成功させた名古屋の人たち。これから観光に向けても新しい取り組みを成功させる力は十分にある。私はそう信じています。」

池上さんはじめ、我々スタッフも今回の番組で「地元のことを改めて考えるきっかけ」を作ることができたと感じています。そして今後も東海地方の魅力を再確認し、この地域が発展できるような課題やこれからの展開を紹介できる番組を制作し、視聴者の皆さんと共に東海地方について考えていきたいと思います。

全国瞬時警報システム(J-ALERT)対応訓練

報道部、報道技術部などニュースに関わる部局では、東海3県で起きる大規模災害や弾道ミサイルが他国から発射されたなど有事の際に、国から発せられる全国瞬時警報システム(J-ALERT)に対応する訓練を、昨年7月に実施しました。今回は、他国からのミサイル攻撃があったことを想定し、被害状況や政府発表など、どのように報道するかを、報道部中心にシミュレーションしました。想定した各現場に記者やカメラマンを派遣し、情報を収集したほか、実際に中継の訓練をするなど本番さながらに取り組んでいました。

東海テレビは社会インフラとしていかなる状況であったとしても、取材・報道し、放送し続けるよう努めていきます。

「世界への約束 この冬の向こうに 平昌五輪 ショートトラック 吉永一貴」

2018年5月27日(日)放送
スポーツ部　伊貝 純矢

「地元にショートトラックで平昌オリンピックを狙える逸材がいる。しかも、まだ高校2年生」。
ショートトラック吉永一貴選手の情報を最初、私はこんな形で耳にしました。吉永選手がもしオリンピック出場を決めたら、開催時には高校3年生。若く有望な選手は応援したい、常日頃からそう考えていた私は、すぐに詳しい情報収集に当たりました。すると母も昔、ショートトラック世界選手権で優勝したことがあるトップスケーターだったということが分かりました。
取材を進めていくと高校生という若さで、オリンピックを目指すことの大変さ、そして親が凄い選手だったがゆえにのしかかるプレッシャーなど様々な場面で、吉永選手が苦悩・葛藤している様子をよく目にしました。
それでも、吉永選手はそういったものを全て乗り越え、オリンピックの舞台に立ちました。
結果は惨敗に終わりましたが、高校3年生で大舞台を経験した吉永選手は4月から地元中京大学に進学。次への4年間、地元で技に磨きをかけていきます。
22歳で迎える北京オリンピックでは何かやってくれる、そう予感させる18歳にこれからも注目していきたいと思っています！

五輪で不本意な成績に終わり号泣する吉永

「東海テレビ開局60周年記念 藤井聡太15才」

2018年1月7日(日)放送
映像制作センター　奥田　繁

今、お幾つですか？「はい、15才です」。
屈託のない笑顔で私の質問にこう返すのは、瀬戸の中学3年生にして将棋のプロ棋士・藤井聡太四段（当時）。2018年1月に放送した「藤井聡太15才」のラストカットだ。
彼を追い始めたのは3年前の夏、12歳の小学六年生でプロ棋士の養成機関“奨励会”で初段の時。これまで中学生でプロとなったのは羽生善治竜王や加藤一二三九段など4人だけで、いずれもその後大成している。
趣味の将棋が幸いして藤井少年の情報を耳にした私は、5人目の中学生棋士誕生が地元からと期待を寄せる。ただ全国の天才少年が集まる奨励会でプロになれるのは僅か2割、地元の天才少年というニュースにはしたくなかったので、プロになるまで放送しませんと師匠の杉本昌隆七段に約束して、私は1人ハンディーカメラで映像を取り溜め始める。
その後の活躍は皆さんご承知の通りで、歴代最年少でのプロ入り、デビュー29連勝など私の予想を超える出来事の連続。対局の取材も私が行くことは無くなり郷土の偉人を報道部全体で扱ってくれるようになった。
次はどんなことで我々を驚かせてくれますか？「いずれはタイトルを獲りたいと思っています」。

小学6年生の藤井少年

大規模災害時の放送継続への取り組み　放送技術部　橋本　茂

東海地方で大規模災害が発生した場合、「電源喪失」、「通信網遮断」、「放送・送信設備の破損」等、放送継続が極めて困難となる障害が発生する可能性があります。
放送技術部では、「本当に危機的状況で頼りになるのは、機械ではなく人の力」という信念の下、2017年のマスター更新を機に、大規模災害を想定した運行マニュアルとトレーニングの内容を更に充実させ、人材育成と体制強化に日々積極的に取り組んでいます。

2 その他の地域貢献

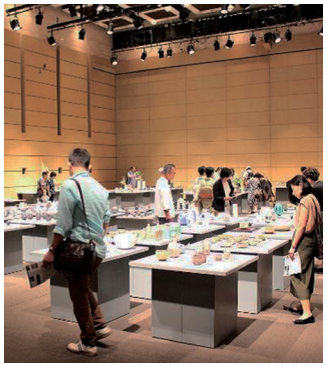
多彩なイベントで地域に活気と潤いを

事業部　竹中麻紀

事業部では地域に根ざしたイベントを開催、多くの皆様に喜んでいただくことで地域に貢献したいと考えています。12回目を迎えた「愛知県市町村対抗駅伝競走大会（愛知駅伝）」や、2018年春、名古屋市営地下鉄とタッグを組んだ初めてのイベント「ナゾトキ街歩きゲーム　地下迷宮に眠る謎」は“街そのもの”をテーマに開催し、地域の賑わいを生み出しています。
また春夏、年２回開催している「名古屋おもてなし武将隊 絆」公演や、「BOYS AND MEN スポライ」「なごや万華鏡落語」などは東海地区で活躍するタレントを起用し、地域と共に成長してきました。
さらに東海地区の陶芸家の作品を展示・販売する「東海陶芸展」や東海三県の日本酒の蔵元を集めて開催した「NAGOYA酒蔵まつり」などは、イベントを通じて来場者に地元の魅力を再発見するきっかけとなり、東海地区の産業発展の一助になればと企画、開催しました。
事業部では今後も「ふるさとイチバン！」を念頭に、地域にとって意義のあるイベントを開催するよう努めてまいります。

第12回愛知県市町村対抗駅伝競走大会（愛知駅伝）

ナゾトキ街歩きゲーム　地下迷宮に眠る謎


東海陶芸展2017

東海テレビの社会貢献活動

「夏休み！みんなのテレビスクール2017」
〈日本民間放送連盟　メディアリテラシー活動助成事業〉

「最近の報道は萎縮していると言われますが、このような意見をどのように考えていますか？」…相手は制服姿の、まだあどけなさが残る中学生。放送界が抱えるジレンマに単刀直入に切り込まれ、私たちオトナの背筋が思わずピシッと伸びた瞬間でした。
東海テレビでは昨年7月28日と8月8日の2日間、「夏休み！みんなのテレビスクール2017」を実施しました。参加者は東海3県4つの中学の生徒20名。テレビ離れが著しい若い世代に、テレビの役割や魅力を知ってもらおうというのが狙いです。
生情報番組のスタジオ見学で始まったテレビスクールでは、番組作りから放送に至るプロセスを9つのカリキュラムに分けて受講してもらいました。
メインイベントは参加中学生による「みんなの番組審議会」。地元の有識者が委員を務めるオトナの番組審議会さながら、審議番組をあらかじめ視聴して、社側の制作担当者との意見交換に臨んでもらいました。
「体育の授業で役立ちそうな内容だった」「もっとテロップ情報を増やしてもらいたい」等々…審議番組に指定した自社制作のスポーツバラエティに、中学生のイマドキ感覚の意見が相次ぎました。業界の常識に染まり切った私たちには新鮮かつ刺激的で、この世代の感性を知る良い機会になりました。
参加者の中には「スマホで何でもわかる時代だから、テレビは全く見ない」「そもそもテレビ局には関心がなかった」というアンチ・テレビ派もいました。この世代とテレビとの距離感を象徴的に示す現実です。しかしテレビスクール参加後の感想文には「正しい情報を送り出すためにテレビがどれだけ気を配っているかがよく分かった」「番組出演者の他、多くのスタッフが見えないところで制作に携わっていることを初めて知った」などの意見がありました。このイベントがテレビと中学生の距離を縮めてもらうきっかけになったのではないかと感じています。

夏休み!みんなのテレビスクール2017
「みんなの番組審議会」

社内見学会

東海テレビの社内見学会は、小学校高学年、中学生、高校生を対象に、番組制作の舞台裏などを見てもらい、テレビに親しみ、テレビの仕事を理解してもらうことを目的に、2016年から始めた取り組みです。
スタジオでの生放送や副調整室等の見学を始め、4K映像やＶＲ技術などテレビ局の最新の取り組みを体験してもらっています。参加する学校も年々増え、毎年見学してくださる中学校もあり、校外学習や部活動の一環として活用していただいています。

■2017年度参加校…19校／約170名が参加

社内見学会の様子

国際交流の取り組み

一般財団法人 東海テレビ国際基金

1994年「東海テレビ国際基金」を設立後、2013年「一般財団法人」として、主に東海地方で国際交流を目的として活動している非営利団体に対して助成を行っています。
また、国際交流に貢献するため、東海地方で暮らす外国人や訪日外国人のため、この地域の文化、芸術、経済など生活や観光に役立つ情報を紹介するＤＶＤを制作。日本語をはじめ英語、中国語など6か国語バージョンを作って、領事館や国際交流団体など約100か所に寄贈しています。

名古屋スペイン協会

東海地方とスペイン、ラテンアメリカなどスペイン語圏の文化、芸術、政治、経済などの交流を図り、相互の理解と親善の促進に寄与することを目的に1986年、設立されました。
現在法人会員は27団体、個人会員約100名、特別会員としてスペインやラテンアメリカなどスペイン語圏出身の方々が加わって様々な活動をしています。

その他の社会貢献活動

新聞音読

2015年10月から中日新聞・生活面掲載の「くらしの作文」を庄野俊哉アナウンサーが音読し、音声を東海テレビのホームページで公開しています。
愛知県内の社会福祉協議会や公民館などで地域の人たちを対象に、庄野アナウンサーが音読を直接指導する「音読の会」を実施していて、昨年7月から今年6月にかけて16回開催しています。

■新聞音読のホームページサイト
http://tokai-tv.com/announcer/ondoku/

新聞音読の会の様子(名古屋市西区)

「絵本の読み聞かせ」イベント〈2017年10月21日開催〉

「幼少時からの読書活動が読解力や表現力の向上のために有効である」とされる事から、地域の子供たちが読書の楽しさを共感できる場に、アナウンサーが参加しました。
今回は東日本大震災をモチーフにした絵本を題材に、読書の楽しさとともに、助け合い、生き抜く力を子どもたちに伝えました。

読み聞かせイベント ｉｎナディアパーク

視聴者からのご意見

東海テレビでは、視聴者の皆様からの様々なご意見を参考に、よりよい放送のありかたを考えています。

第三者機関としての機能向上を目指す　番組審議会

東海テレビの番組審議会は、放送エリアの愛知・岐阜・三重で活躍する識者10名に委員を委嘱し、8月を除く毎月開催しています。毎回、自社制作番組が審議対象になりますが、多様なバックボーンを持ちつつ、一人の視聴者でもある委員の意見はまさに十人十色。歯に衣着せない辛口批評から、次の番組作りにつながる温かいエールまで、それぞれの立場から見解をいただいています。一方、2017年1月から東海テレビ番組審議会が独自に実施している「私とテレビと東海テレビ」のコーナーはほぼ1年半が経過しました。「犯罪被害者に配慮した報道」「未来のテレビのあり方」「地元の人が誇りを持って外に発信したくなるような番組作り」「災害報道と被害者への配慮」など、いずれも今後の番組制作にも役立つ問題提起やアドバイスとなっています。この2018年6月からは「きになるテレビ」とコーナータイトルを変更、より幅広い視点から、“気になるテレビ”について、貴重な意見を引き続きいただいています。

2018年度東海テレビ放送番組審議会委員

委員長	浅田　剛夫〈井村屋グループ㈱代表取締役会長〉
副委員長	後藤　ひとみ〈愛知教育大学学長〉
委員	伊藤　彰彦〈東海旅客鉄道㈱取締役常務執行役員〉
委員	大松　利幸〈岐阜プラスチック工業㈱代表取締役会長〉
委員	片岡　明典〈中部電力㈱代表取締役副社長執行役員〉
委員	川谷　陽子〈愛知医科大学病院 フライトナース〉
委員	黒野　友之〈㈱名鉄百貨店 代表取締役社長〉
委員	林　寛子〈㈱中日新聞社 取締役〉
委員	福谷　朋子〈弁護士〉
委員	山岡　耕春〈名古屋大学 教授〉

視聴者の皆さんにご報告「メッセージ1」リニューアル

「メッセージ1」第4日曜日早朝放送

「おはようございます！庄野俊哉です。」…毎月第4日曜日(※)にお届けしている視聴者対応番組「メッセージ1」。22年目を迎えたこの4月、午前5時15分から視聴者の皆さんにお目にかかることになりました。これに合わせ、オープニングやスタジオセットもリニューアル、新たな気持ちで番組をお届けしています。番組では視聴者の皆さんから寄せられた番組に対する意見や問合せを紹介、また番組審議会の議事概要なども報告しています。今後も視聴者の皆さんと東海テレビをつなぐ懸け橋としての役割を、担っていければと思います。（※放送日時変更の場合もあり）

視聴者対応業務

ドラマ、バラエティ、報道、スポーツ…様々なジャンルの番組に対し、視聴者対応の窓口には、毎日、多くの方々からご意見をお寄せいただいています。2017年度に寄せられた意見はメールが20,199件、電話や文書が11,755件の合計31,954件ありました。自社制作番組はもちろんのこと、特に最近は午後帯の情報番組で取り上げられるテーマへの意見も急増中。白熱する出演者の議論に参加するかのように「私はこう思う」「あのゲストの言っている意見には反対だ」といった意見を耳にするようになりました。テレビが話題を提供し、様々な角度から生の声を聴くことができるのは、この業務だからこそといえます。ご意見は社内や系列局で共有し、今後の番組作りの参考にさせていただいています。

社外モニター

東海テレビの社外モニターは毎年度上期と下期に分け、各期10名の視聴者に、月4本程度の自社制作番組に対し意見をいただいています。2017年度は合わせて53本の番組について様々な意見をお寄せいただきました。性別、世代、職業など、立場が違う方々の多角的な視点は、私たちテレビ局側にも多くの気付きを与えてくれます。
任期終了時には番組審議室の担当者とモニターとの懇談会を行い、テレビについてご意見を伺っています。

2017年度下期モニター懇談会における主な意見

- ネット情報や新聞とは違う、そしてキー局に頼らない番組を作ってもらいたい。
- 面白いものと低俗なものはすみ分けが難しいと思うが、これからもきちんと倫理観をもって番組を作ってもらいたい。
- パソコンもあまり得意ではないし、ガラケーなので、情報を集める一番の手段がテレビ。今後も小さくまとまりすぎることなく、攻めた番組作りをしてもらいたい。
- dボタンの機能について、スマホで画面を触る感覚で扱えるような、楽しい出来事や情報を得られるようにしてほしい。
- 今見た番組が、今の子どもたちの将来の仕事や目標につながるかもしれないので、いろいろな仕事に目を向けた番組作りをしてもらいたい。

第三者意見

オンブズ東海 委員長
坂井 克彦
㈱中日新聞社 相談役

報道をするにあたって大事なこと。いくつもあるけれど、最も大事なことは「その内容に間違いがないこと」かと思う。では、どうしたら間違いを犯さずに済むか。面倒でも確認を怠らない。それに尽きる。一般的に言えば、よく知られている地名や人名では間違いは少ない。

たとえば「熱田」という地名は、名古屋の人のみならず、日本人ならたいていの人が「あつた」と読む。「熱」を「あた」と読む静岡県の「熱海」「熱川」の人も、自分のところは「あたみ」「あたがわ」でも、名古屋の「熱田」を「あたた」とはたぶん言わない。「熱田さん」と長く親しまれてきた熱田神宮の歴史の賜物だろう。

では、同様に、よく知られていると思われる「愛知」ではどうか。日本有数の大きな県の名前だから、ほとんどの人は「あいち」と読む。とくに問題はなさそうだが、しかし、滋賀県で琵琶湖に流れる「愛知川」は「あいちがわ」ではない。「えちがわ」と読む。確認せずに、うっかり「あいちがわ」と読むと、少なくとも滋賀県の人からはクレームがつく。

もう少し例を挙げてみよう。

羽生さんはどうだろう。同じ羽生さんだが発音が違う。とてもとても将棋の強い人は「はぶ」さんで、フィギュアスケートでオリンピックを連覇したのは「はにゅう」さん。いまや二人とも国民栄誉賞を授与され、超有名人になったから、少なくとも放送人の中で間違う人はほとんどいないと思うけど、数年前なら、どっちがどっちかと迷う人がいなくはなかった。「同じ字なら同じ発音で」というのなら話は簡単だが、こればかりは傍からどうこうできることではない。せいぜい、ハブのように将棋が強い羽生（はぶ）さん、柔らかい感覚で氷上で舞う羽生（はにゅう）さん、と覚えるくらいしかない。

この手の話はキリが無いので、最後にひとつだけ。豊橋の沿岸部に広大な干拓地が広がっている。神野新田という。神野さんという人の尽力でできたので、こういう名前になったというのだが、さてどう読むか。正解は「じんの新田」を造った「かみのさん」ということらしい。ややこしいのは神野を「かんの」と読む名字もあることだ。

マスコミは常に正しさを求められる。とりわけテレビの場合は中身はもちろん、発音の正確さも要求される。7年前の「事件」以来、東海テレビの倫理面での取り組みには、評価も高く、かつ頭の下がる思いだが、信用を持続する努力に終わりはない。「確認」はそのための基礎の基礎といっていい。これができてこそのコンプライアンスだろう。

面倒だけど、確認を怠らないこと。それによってミスが減り、会社そのものに信用が出来ていく。そういうサイクルを作って行ければと思う。

坂井 克彦
さかい かつひこ

1945年生まれ。1967年中日新聞社入社。主に編集部門を歩み、ニューヨーク特派員や東京本社編集局長を歴任、常務取締役、中日ドラゴンズ社長などを経て2014年から現職。今年1月からオンブズ東海委員長。

この1年の主な取り組み

2017年7月から2018年6月にかけての取り組み

2017 平成29年

7月	放送倫理を考える月間
7月20日	平成29年度上期放送人研修会 講師：沼田 通嗣 氏（㈱テレパック 取締役プロデューサー）
7月26日	ネット法律勉強会（報道部）
7月31日	内田社長　岩手訪問（8月1日岩手県内被災地視察）
8月 4日	放送倫理を考える日　放送倫理を考える全社集会
9月 1日	第16回 コンプライアンス責任者会議
9月 5日	第12回 コンプライアンス委員会
9月11日	「オンブズ東海」第23回委員会
10月28日	東海テレビ感謝祭（～29日 震災復興支援ブース）
12月 6日	第17回 コンプライアンス責任者会議
12月11日	「オンブズ東海」第24回委員会
12月14日	下請法　説明会（12月18日、20日も実施）（編成開発部）

2018 平成30年

2月19日	平成29年度下期放送人研修会 講師：古田　大輔氏（㈱BuzzFeedJapan 創刊編集長）
2月26日	第18回 コンプライアンス責任者会議
3月12日	「オンブズ東海」第25回委員会
3月19日	コンプライアンス責任者対象ハラスメント研修
3月26日	第13回 コンプライアンス委員会
3月29日	社外アドバイザー報告
4月17日	ハラスメント防止研修　全従業員対象eラーニング形式（5月18日まで）
6月 1日	第19回 コンプライアンス責任者会議
6月11日	「オンブズ東海」第26回委員会

この1年で表彰を受けた、主な当社制作の番組やCM（2017年7月～2018年6月）

■平成29年度日本民間放送連盟賞

特別表彰部門 放送と公共性

「伝える、つなぐ～名張毒ぶどう酒事件報道の40年～」最優秀賞

CM部門

「公共キャンペーン・スポット／この性を生きる。」優秀賞
「キリンラーメン／こちらキリンでございます」優秀賞

■第55回ギャラクシー賞

報道活動（上期）

「伝える、つなぐ～名張毒ぶどう酒事件報道の40年～」選奨

CM部門（上期）

「公共キャンペーン・スポット／この性を生きる。」選奨

おわりに

「東海テレビ この1年の取り組み2018」を最後までご覧いただきありがとうございました。
「ぴーかん問題」から7年がたち、この間、私どもは放送倫理の向上や社会貢献など様々な取り組みを重ね、放送やイベントを通じて地域に貢献、岩手県をはじめ東日本大震災の被災地の復興支援に努めてまいりました。
東海テレビは今年、開局60年を迎えました。あらためて、我々が歩んできた道を振り返り、信頼を得られるよう、さらに将来に向け、良質なコンテンツを送り続けていきます。

＜編纂・監修＞
東海テレビ放送　コンプライアンス推進局　コンプライアンス推進部
〒461-8501　愛知県名古屋市東区東桜一丁目14番27号
Tel. 052-951-2511（代表）　http://tokai-tv.com/

発行年月　2018年8月　※文中の所属・肩書については原稿作成時点のものとなっています。